

ツバル人児童における母語と英語の捉え方

— 言語使用・言語志向からみるツバル語の未来 —

How the Primary School students in Tuvalu Use and Perceive the Tuvaluan and the English Language

橋 広 司

Hiroshi TACHIBANA

1. はじめに

ツバルは、ポリネシア西部に位置する人口約1.1万人、国土面積わずか25.9km²の極小の島嶼国である。国民のほとんどはポリネシア諸語のひとつであるツバル語を母語としており¹⁾、ツバル語と英語が国の公用語になっている。多くの旅行雑誌・書籍やインターネットの旅行サイトでは、ツバルの言語に関して、「英語、ツバル語」と英語を第一にあげ、ツバル語をあとに添えるかたちをとっている。外務省ホームページのツバルの基礎データにも同様に、「言語：英語の他、ツバル語（ポリネシア系言語でサモア語に近い）を使用」とある。ところが、実際にある程度の期間現地に滞在すればわかることだが、ツバル人同士の会話のなかで英語を耳にするのは稀なことであるし、英語を解さない人も少なくない。しかし一方で、今日、ツバル人は島の都市化、貨幣経済化により伝統的な生活様式を失いつつあり、こうしたくらしの変容が、ツバル語の生活語彙の衰退に拍車をかけている。

ツバルは9つの島を有しているが、近年、人々は伝統的なくらしが残る離島から都市化がすすむ首都フナフティ環礁へ移住する傾向がある。フナフティの人口は1978年のツバル

独立以来年々増え続けており、いまや国民の半数以上がここに住んでいる²⁾。さらに、人々の流れは国外にも向いている。無論、ポリネシア人の移動はいまに始まったことではないが、ニュージーランドが2002年よりPAC（Pacific Access Category：太平洋諸島特別永住権取得枠）を設置して以来、ツバルからニュージーランドへの移民の数は一層増え続けており、それにともない移民二世の人口も増加している。ニュージーランド政府の2018年のセンサスによると、ツバル語を話すツバル人移民の割合は、すべての世代で減少傾向にあり、とりわけニュージーランド生まれの子どもたちを含む若年層の減少率は著しい³⁾。

世界の消滅の危機に瀕した言語に関する情報を掲載したUNESCO Atlas of the World's Languages in Danger（Moseley, ed. 2010, 第3版）によると、ツバル語は、話者人口約11,000人の「明確な危機にある（definitely endangered）」言語である。このような状況にありながら何の策も講じなければ、ツバル語も英語偏重の教育政策の末に話者数が激減していったクック諸島マオリ語と同じ轍を踏むことになる可能性があるだろう。

本稿の目的は、フナフティで初等教育を受

けるツバル人児童への質問紙調査の結果をもとに、母語であるツバル語と公用語としての英語を児童がどのように捉えているのか、また将来どこに住み、どの言語を使用することを希望・予測しているかなど、児童らの言語使用の実態と言語に対する志向を知ることである。筆者は2018年にフナフティにて、ツバルの言語教育の実態と国民の言語観・言語使用状況を明らかにするために、公立プライマリースクール（以下、PS）のカリキュラムと教材の調査および児童への質問紙調査を実施した。カリキュラムと教材の調査では、すでに橘（2020）で報告しているとおり、母語軽視・英語偏重の言語教育の傾向を明らかにした。本稿では主に、児童への質問紙調査の結果を分析・考察する。

2. 先行研究

ツバルの言語政策、言語教育、国民の言語使用や言語意識に関する先行研究はきわめて少ない。とりわけ、PSの言語教育や児童の言語と捉え方を論じた研究は管見のかぎりない。

本稿に関連する研究としては、Deverell（1986）によるツバルをふくむ7か国の南太平洋島嶼国の調査があげられる。Deverellは、各国のプレスクール（幼稚園）における保護者（216名）と教員（194名）の言語使用と言語意識を調査し、早期英語教育と母語維持の実態について考察している。ただし、サモアとトンガの被験者に英語母語話者がいたり、調査項目によっては数人の回答しか得られていないものがあつたりと、やや信ぴょう性に欠ける点がある。それでも、全体の傾向を知るうえでは貴重な資料といえるだろう。この調査によると、ツバルの未就学児の家庭における使用言語の割合は、ツバル語が80%、英語が20%という結果であつた。また、保護者

が授業中の教授言語（媒介言語）として希望する言語は、ツバル語のみ：0%、英語のみ：6.7%、ツバル語+英語：80%という結果であり、実際、回答したすべてのプレスクールでツバル語と英語の両方が使用されていた。また、保護者が子どものプレスクールでの英語学習を望む理由は、「教育で成功を収めるため」：100%、「国際語を使えるようにするため」：40%、「将来の成功のため」：26.6%であつた。13の選択肢から複数回答できる形式であつたが、上記3つの理由以外、たとえば「コミュニティ内での意思疎通のため」、「子どもがより速く楽に学習できるから」、「本や新聞を読むため」などの選択肢には1票も入らなかつた。なお、「教育で成功を収めるため」の選択肢にはすべての国で比較的多くの票が集まつたが、それでもツバルを除けばバヌアツの57%が最高であり、ツバルの100%という結果は突出している。Deverellは、早期英語教育が認知的発達や教育的成功にとって逆効果をもたらす可能性があることを示す研究結果があるにもかかわらず、未就学児の教育における英語使用に否定的な回答はほとんどなかつたと指摘している。さらに注目すべき点は、「教員からみた教授言語として英語を用いることの不利益と問題点」に関する回答結果である。「言語喪失」「慣習喪失」が0%である一方で、教員の訓練不足：36.3%、教員の母語でないため：36.3%、家庭で使われていないため：27%、発音が困難なため：27%、教材不足：18%、意思伝達が困難なため：9%、という結果であつた。つまり、言語や慣習の喪失は問題ではなく、もし教師が英語に堪能であり、教材が充実してさえいれば、英語を教授言語とした方がよいと考える教師が少なくないということがみて取れるのである。

Lotherington（1998）は、ツバルをふくむ

南太平洋諸国の11の島嶼国を対象に、言語政策およびバイリンガル教育について論じている。対象国には移行型（Transitional Bilingual Education, 以下TBE）、維持型（Maintenance Bilingual Education, 以下MBE）、英語サブマージョン型（English Submersion Education, 以下ESE）の3つのバイリンガル教育の形態がみられ、ツバルはTBEである。ツバルのPSでは、ツバル語のみを教授言語とするのは3年次までで、4年次以降はツバル語以外の全教科が原則として英語を用いて教授される。Lotherington（1998：72）は、南太平洋島嶼国のバイリンガル教育はいまだポストコロニアル的状况から脱却していないとして、読み書きをふくむ母語教育のための教材開発と政治的社会的支援、映像マスメディアでの母語使用のための政治経済的援助、第2言語としての英語の教育的援助、母語の読み書き能力習得のための教育的・コミュニティ的援助の必要性を訴えている。ツバルに焦点をしばった研究ではないものの、ツバルの母語教育問題にとってきわめて示唆的な論考である。Lotheringtonの議論に関しては次章でより詳しく取りあげる。

ツバル唯一のセカンダリースクール（以下、SS）、Motufoua Secondary School（以下、MSS）の教員であるIoane（2015）は、すべての児童生徒に技術、知識、経験の提供を保証するカリキュラム開発と教育政策の必要性を論じ、カリキュラムモデルを提示している。また、教育政策とカリキュラムにおけるイデオロギーの問題を、教育学者アイスナーによる「カリキュラムの3類型」を用いて論じている。カリキュラムの3類型とは、国家が定め、学校が実践する「顕在的カリキュラム」、教える側が意図せずとも児童生徒が学校生活のなかで学びとる「潜在的（隠れた）カリキュラム」、学校では教えられない「ナル・カリ

キュラム」のことである。これをツバルの教育に照らし、SSにおいて教科として存在しない「ツバル語（国語）」は、ナル・カリキュラムにあたると述べている。Ioaneは論じていないが、Eisner（2002）のいうように、ナル・カリキュラム、すなわち「教えられないカリキュラム」とは、たんに「空虚」「ゼロ」を意味しない。「教えないこと」自体にイデオロギーが存在するのである。このことは、Lotherington（1998）が南太平洋島嶼国のバイリンガル教育のポストコロニアル的状况について主張する以下の記述にも通じることである。

南太平洋諸国のポストコロニアル的バイリンガル教育が脱植民地化に向かっていないことは明らかである。これらの国の今日の言語政策は社会経済的動機によるもので、土着の文化と言語の維持に努めるというリップサービスをしながら、本質的には外向きであり、国際貿易の言語である英語による運用能力、読み書き能力、学歴、さらには娯楽としての映像メディアの方向に向いているのである。（Lotherington 1998：72）

以上の先行研究からもわかるように、ツバルの公教育における母語教育は十分とはいえない。次章では、さらにツバルの言語教育の実態について筆者の調査からわかったことを論じる。

3. ツバルの言語教育の実態

本稿の目的であるツバル人児童の言語使用・言語への志向について論じる前に、ツバルの教育全体における教授言語および教科としての言語教育の実態について概説しておく。

表1は、ツバルの学校制度をまとめた表である。6歳から13歳までのPSの8年間は義務教育であり、無償で教育が提供される。

就学前教育としてECCE (Early Childhood Care and Education) があり、3歳から5歳までの未就学児が受けることができる。6歳から初等教育が始まり、1～6年次までの学年は「Class 1～6」、7年次からSSの13年次までは「Form 1～7」と呼ばれる。前章でも述べたが、ツバルのPSでは、4年次以降ツバル語を除くすべての授業における教授言語が英語になる。ただし、児童の理解度に応じてツバル語を交えて教えられることが多い。Lotherington (1998:66)によると、ツバルのほかにニウエとキリバスも同様の方針をとっている。バイリンガリズム研究の観点からすると、この教育方針は主流への同化を最終目的とする同化主義にもとづいた「移行型」(Transitional Bilingual Education, 以下、TBE)である。TBEでは、目標言語の習得が不十分な時期においては学習者の母語を部分的・全体的に教授言語としながら教育を進め、やがて全面的に目標言語による教育へと移行していく。いわば、イマージョン教育のように最初から学習者をメインストリームのプールに放り込むのではなく、一時的に、短い時間水に浸かることを繰り返し、最終的にメインストリームのプールで自由に泳げるようにするというのがTBEである (Baker 1997)。

全体的にみると、今日の南太平洋島嶼国の教育は、かつてもっとも一般的であったTBEから、より母語維持を意識したMBEに移行しつつあり、クック諸島、トケラウ、トンガ、サモアなどは、現在MBEカリキュラムを敷いている。フィジーは、教育政策としてはMBEのカリキュラムを掲げているものの、都市部の学校や、多民族で構成されるカトリック学校などではESEカリキュラムによる教育が一般的である (Lotherington 1998:68)。フィジーに関しては、フィジー系とインド系を中心とした多民族・多文化国家であり、とくに都市部では共通語としての英語が発達しているという事情が関係しているといえよう。一方、クック諸島、トケラウ、トンガ、サモアなどの国がMBEに移行している理由には、両国とも自国を離れてニュージーランドやオーストラリアへ移住する国民人口の割合がきわめて高く、これが母語衰退の大きな原因となっているという事実があげられる (Tryon 2006)。くわえて、とくにクック諸島民の母語であるクック諸島マオリ語は、かつての母語使用を禁止する英語偏重の教育政策により、現在消滅の危機に瀕しているという問題がある。Biewer (2015)の調査によると、クック諸島のSSのある教師は、生徒のクック諸島マオリ語と英語の使用比率は2:8であると述べたという。また、Edwards (2013)が聞き取り調査の対象とした3名の

表1 ツバルの学校教育制度 (橋2020)

教育段階	Pre-primary education			Primary education									Secondary education				
教育施設	ECCE			Primary school									Secondary School				
年齢	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
学年				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	
Class				1	2	3	4	5	6								
Form										1	2	3	4	5	6	7	
義務/任意	任意			義務									任意				

クック諸島の教師も、島民のアイデンティティとしての母語を子どもたちに身につけさせることの必要性について強く訴えている。このような状況にあって、かつて極端なESEカリキュラムを敷いていたクック諸島は、いまや母語喪失の危機感をもってMBEにもとづいた教育を実施しているのである。

さて、ツバルの言語教育カリキュラムはというと、対象言語はツバル語と英語の2言語、1週間の授業時数は表2のとおりである。全学年を通して、英語にかなり多くの時間を割いていることがわかる。この表にある時間数は、筆者が2018年に、フナフティのナウティPS (Nauti Primary School) にて直接教員に確認したものである。ツバルには授業時数を明示したカリキュラムは存在せず、そのためか、週7時間という学年が多いなか、ところどころ5時間、6時間、8時間などの学年がみられる。しかし、いずれの学年もツバル語と比較するとその差は歴然としており、英語に対する力の入れようがうかがえる。

PSにおけるツバル語の授業は、学年が上がるにしたがって減少し、8年次には週3時間、英語の半分以下の時間となる。さらに、SSでは、各学年7時間の英語授業に対して「ツバル語」という授業はいっさい行われなくなる。その代わりに、ツバルの言語、歴史、文化を総合的に学ぶTuvalu Studiesが新たに始まる。つまり、SSからはツバル語に触れ

る授業がかるうじて週に一度実施されるのみということになる。

前章で述べたように、Lotherington (1998)によると、南太平洋島嶼国の言語政策は自国の言語文化の維持を謳いながら、その実、英語偏重に陥っているということであった。この傾向は、ツバルの言語政策にもみられるようである。以下は、ツバル政府が2013年に発表したTuvalu National Curriculum Policy Framework (TNCPF) に記された言語と文化の重要性に関する文言である。

ツバルにおける6つの島ことばは、島民の文化の維持にとって最重要事項である。ツバル語はツバルの都市部およびほとんどの離島の第一言語である。ツバル語を維持するための高度な能力の発展は、ツバル文化の維持、さらなる発展、保存のために必要不可欠である。TNCPFは学校におけるカリキュラムの開発、計画、実施のための言語と文化の重要性を認識している。(Ministry of Education, Youth and Sports 2013: 31)

上記の文言は、TNCPFのなかでカリキュラムにおける「Cross Cutting Theme (分野横断的テーマ)」として政府が掲げる5つのトピックの最初にあげられたLanguage and Cultureに書かれたものである。TNCPFでは、

表2 言語教育の1週間の授業時数 (橘2020)

教育段階 教育機関	Primary education								Secondary education					
	Primary school								Secondary school					
年齢	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	
英語	7	5	7	7	8	8	7	7	6	7	7	7	7	
ツバル語	7	5	5	5	5	5	5	3	0	0	0	0	0	
書き方 (英語)	5	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
Tuvalu Studies	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	

「これらのテーマは、すべてのレベルの学校教育を支えるものであり、異なる段階のすべての学習領域において強調されるべきものである」としており、政府がカリキュラムにおいていかに言語と文化を重視しているかがうかがえる。また、この文言に続いて以下の表(表3)が掲載されている。

TNCPFには年間授業時数は記されておらず、このきわめて大ざっぱな表があるのみである。この表によると、PSでは8年間を通してツバル語、英語、そしてPrinting and Writing(アルファベットの書き方練習)が実施され、SSでは5年間を通してツバル語と英語の両方が教授されているかのようにみえる。しかし、実際にはすでに表2でみたとおり、Printing and WritingはPSの1, 2年次のみであるし、SSでは「ツバル語」という教科はなくなるのである。これでは十分な母語教育を実施しているとはいいがたい。筆者が2018年にインタビューしたSSの30代男性教員は、「政府はツバルの文化や伝統を大事にせよというわりには、学校では英語に週7時間を割き、ツバル語にはたったの1時間しか与えない。私は生徒たちのツバル語に英語が混ざってきていることを心配している。」と述べた。しかも、彼のいう「たったの1時間」の授業さえも、前述のとおり言語に特化した授業ではないのである。この件について筆者が尋ねたのはこの教員ひとりであったため、じつのところ問題の所在が政府なのか、教育現場なのか定かではないが、ツバルの言語教育が英語偏重、母語軽視の傾向にあることは確かである。

表3 TNCPFが示すツバルの言語教育

Year	Primary	Year	Secondary
Year 1-8	Tuvaluan Language	Year 9-13	Tuvaluan Language
	English		English
	Printing and Writing		

4. 公立初等教育学校における質問紙調査

本章では、筆者が2018年にナウティPSにて実施したツバル人児童の言語使用および言語志向に関する質問紙調査について論じる。

4.1 調査の概要

筆者は、2018年の8月から9月にかけて首都フナフティを訪問し、9月2日に、6歳から13歳までの子どもたちが通う公立初等教育学校、ナウティPSにて質問紙調査を実施した。調査の対象としたのは、担任教師の協力を得ることができた4, 5, 7, 8, 9学年の児童155名である。表4は、学年別・男女別児童数を示したものである。

表4 質問紙調査対象児童数

	男子	女子	不明	計
4年	15	16	3	34
5年	9	16	0	25
7年	9	14	1	24
8年	17	29	0	46
9年	9	14	3	26
計	59	89	7	155

ツバルは、きわめて単一的な民族構成の国である。ツバル政府の2017年のセンサスによると、国内人口10,193人のうち97%はツバル人であり、残りの3%は、「ツバル/キリバスの混血」、「ツバル/その他の民族の混血」、あるいは「その他の民族」である。

質問紙調査の実施目的は、以下の3点について明らかにすることである。

1. 現在の言語使用の実態(現在、児童たちは母語であるツバル語と公用語である英語

をどのような領域でどの程度使用しているのか)

2. ツバル語と英語に対する志向（ツバル語と英語をどのように捉え、両言語に対してどのような感情をもっているのか）
3. 将来の言語使用の希望・予測（将来どこに住み、どの言語を使用することを希望・予想しているか）

質問紙はA3紙の裏表にそれぞれ英語とツバル語の両方で用意し、どちらかの面を児童が選択して取り組むように、教員に指示をお願いした。しかし、指示が正しく伝わっておらず、両面に回答した児童もあり、結果はツバル語選択者：25.2%（39人）、英語選択者45.2%（70人）、両方：29.7%（46人）となった。両方に取り組んだものも含めると、英語を選択した児童は74.9%におよぶ。前章で述べたような英語教育への力の入れようを考えると、児童の英語の知識・技能はそれなりに高いのかもしれない。しかし、「英語ができる」ことと「英語を選択する」ことは必ずしも同じではない。英語を選択する理由には、学習している言語を使いたいという意欲や積極性などの内的要因のほかに、教育的・社会的高評価につながるだろうという予測や教師に日ごろから英語を積極的に使用するよう指導されているなどの外的要因も考えられる。つまり、英語がさほど得意でない児童や、本当はツバル語で取り組みたいと思っている児童も混在している可能性があるだろう。事実、英語を選択した児童の回答のなかには質問の意図を理解していないものも少なくなかった。他方、「ツバル語を選ぶ」こともまた、必ずしも「英語ができない」と同等の意味をもつわけではない。そこには、英語より母語であるツバル語を使いたいという意志や、英語は得意だがそのときはたまたま疲れてい

て、回答が容易な母語を選んだということも考えられよう。

質問紙には10の質問を用意した。以下は、各質問の日本語訳である。なお、議論の便宜上、実際の質問紙とは順序が異なる（実際の質問紙は資料1、2参照）。

- (1) 日常生活で、ツバル語と英語のどちらをより多く使いますか。
- (2) 以下の状況において、ツバル語と英語のどちらでより多く話しますか：「父親と」「母親と」「兄弟姉妹と」「友人と学校で」「友人と学校以外で」「英語の先生と」「英語以外の教科の先生と」。
- (3) ツバル語を話すのが好きだ。
- (4) 英語を話すのが好きだ。
- (5) 授業中、英語で教わるのとツバル語で教わるのではどちらが好きですか。
- (6) 英語は自分の将来にとって大事だ。
- (7) ツバル語は自分の将来にとって大事だ。
- (8) 将来どこに住みたいですか。それはなぜですか。
- (9) 将来何がしたい／何になりたいですか。
- (10) 将来ツバル語と英語のどちらをどのくらいの割合で使用していると思いますか。

質問(1)(2)は、ツバル語と英語の使用領域をふくむ「現在の言語使用の実態」を知るためのものである。また、(3)~(7)は児童の「ツバル語と英語に対する志向」を知るため、(8)(9)(10)は「将来の言語使用の希望・予測」を知るための質問である。なお、質問(3),(4),(6),(7)には選択肢（「強くそう思う」「そう思う」「そう思わない」「まったくそう思わない」）を付した。以下に、調査結果をみていく。

4.2 調査結果1：現在の言語使用の実態

はじめに児童たちの現在の言語使用状況に

ついてみてみよう。質問(1)では、日常生活においてツバル語と英語のどちらをより多く使用しているかを尋ねた。質問の形式は、質問文のあとに、「 ツバル語・ 英語」のいずれかにチェックマークを入れるというものである。ただし、両方にチェックを入れる回答者もいた。その結果、ツバル語：76.2% (119人)、英語：17.3% (26人)、両方：3.9% (6人)、無回答2.6% (4人)となった(図1)。ツバル語と回答した児童が圧倒的多数であったが、英語をより多く使用すると回答した児童も155人中26人いることがわかった。さらに、学年別にみると一定の傾向がみとれる。G4：29.4%、G5：20.0%、G7：20.8%、G8：8.7%、G9：7.7%と、概して低い学年の方が英語をより多く使用する児童の割合が高いということである(図2)。

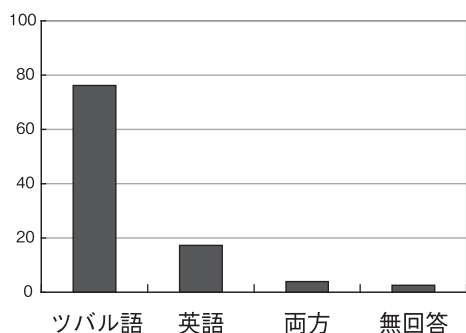


図1 日常の使用言語

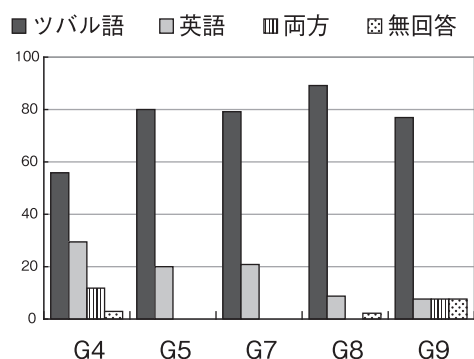


図2 学年別日常の使用言語

では、児童たちがどのような社会的領域においてツバル語ないし英語を使用しているのかをみてみよう。(2)「次の状況の会話においてツバル語と英語のどちらをより多く用いて話しますか」という質問のあとに、状況設定として「父親と」「母親と」「兄弟姉妹と」「友人と学校で」「友人と学校外で」「英語の先生と」「英語以外の教科の先生と」の7つをあげた。回答方法は、それぞれの項目で「 ツバル語・ 英語」のいずれかにチェックマークを入れるというものであるが、最初の質問と同様に、両方にチェックを入れる児童もいた。以下に回答結果をみていく。

まず、親との会話に使用する言語であるが、ツバル語は、父親(80.6%)、母親(78.1%)ともに多く、英語はそれぞれ20%、25.2%にとどまった(図3)。学年ごとにみると、「父親と話するとき」「母親と話するとき」とも概して低学年の方がより英語使用率が高いことがわかる(図4、5)。父親に対する英語使用率は、G4：29.4%、G5：40%、G7：16.7%、G8：10.9%、G9：7.7%である。G4はG5に比べるとやや下がるものの、G7～G9のいずれよりも高い。一方、ツバル語の使用率は、G4：74%、G5：64%、G7：75%、G8：89.1%、G9：96.1%と、概して高学年の方が高率となった。

母親に対する英語使用率はG4：38.2%、G5：28%、G7：20.8%、G8：19.6%、G9：19.2%と、やはり低学年の方がより高率であり、反対にツバル語使用率はG4：61.8%、G5：76%、G7：75%、G8：89.1%、G9：85%と、概して高学年の方が高率を示している。

これにくわえて、「兄弟姉妹と話するとき」においても同様の傾向がみられた(図6)。英語使用率はG4：32.3%、G5：36%、G7：33.6%、G8：15.4%、G9：19%、ツ

ツバル人児童における母語と英語の捉え方（橘）

バル語使用率はG4：58.8%，G5：64%，G7：63%，G8：88%，G9：83.6%である。友人に対する言語使用に関しては、両親や兄弟姉妹の結果ほど顕著ではないが、「学校で」

「学校以外で」ともに、高学年に比べると低学年の方が比較的英語使用率が高いという結果になった（図7，8）。

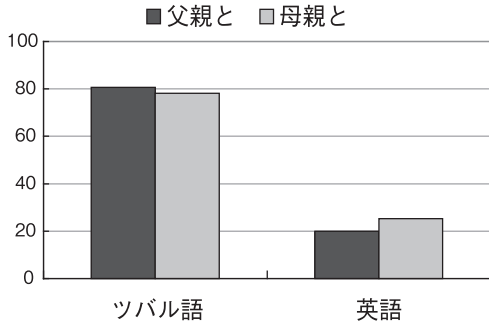


図3 父親・母親と話するとき

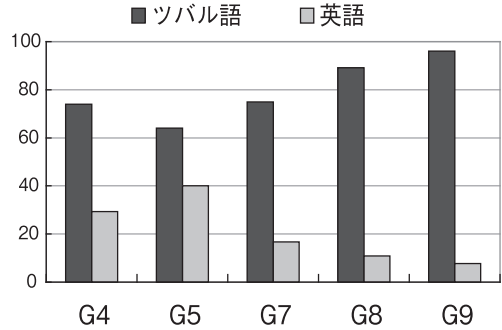


図4 父親と話するとき

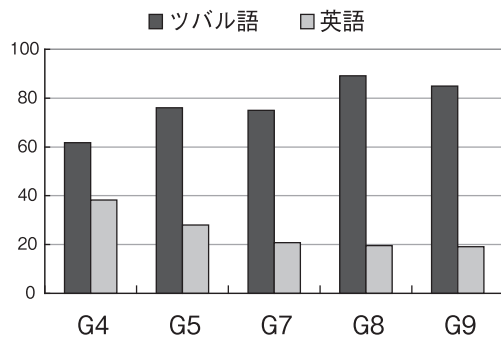


図5 母親と話するとき

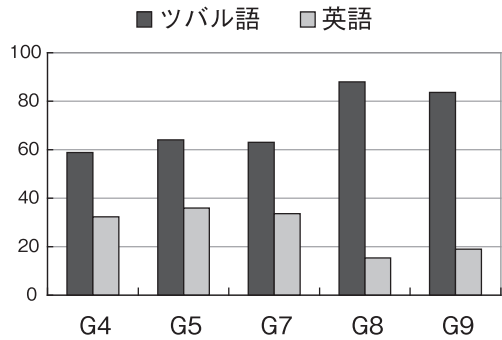


図6 兄弟姉妹と話するとき

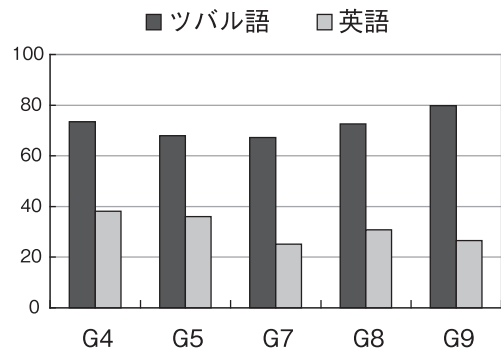


図7 友人と学校で話するとき

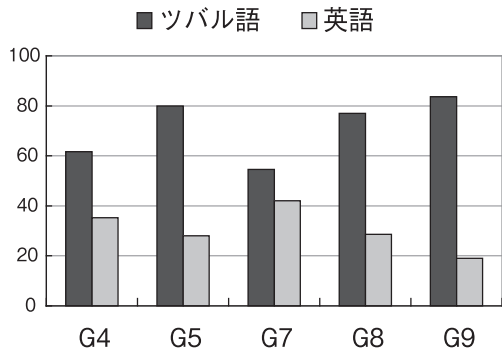


図8 友人と学校以外で話するとき

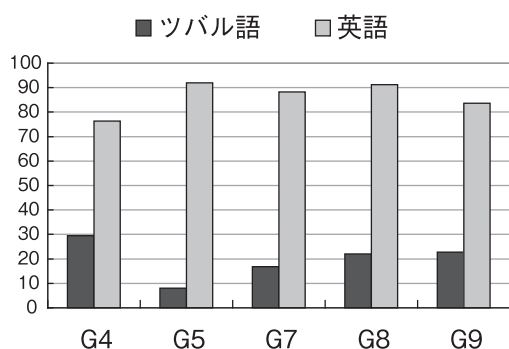


図9 英語の先生と話すとき

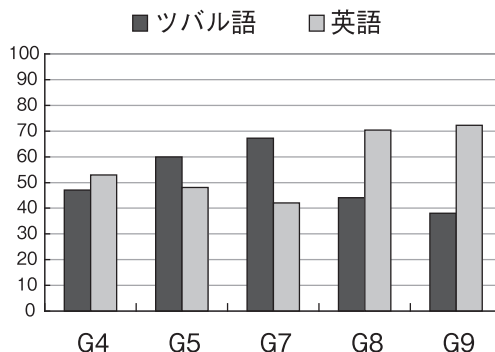


図10 英語以外の教科の先生と話すとき

さて、ここまでの結果をみると、両親、兄弟姉妹、友人と話す際には、学年、相手、状況などにより相違はあるものの、全体としてツバル語の使用が英語の使用を大幅に上まわっていることがわかる。他方、教師に対する言語の使用率は、英語がツバル語を上まわる(図9, 10)。当然かもしれないが、とりわけ「英語の先生と話すとき」には、どの学年も7割から9割以上が英語を使用すると回答した(図9)。「英語以外の教科の先生と話すとき」においても、英語使用率は下がるものの、両親、兄弟姉妹、友人と話すときと比べると高率である。とくに、G8(70.4%)、G9(72.2%)では7割以上であるし、G4の英語使用率は52.9%であるが、ツバル語の47%より高率となっている。

以上、児童の現在の言語使用の実態をみてきた。その結果、両親、兄弟姉妹、友人(校内・学校外)に対しては、どの学年でもツバル語の使用が英語使用を大きく上まわり、反対に教師、とりわけ英語教師に対しては、英語使用がツバル語使用を大きく上まわった(図11)。さらに、家族や友人では、高学年よりも低学年の方が概してより英語使用率が高いという結果となった。このことから、現在のツバル人児童の英語使用状況には、英語の学習歴の長さや学力とは別の要因があること

が考えられる。筆者がツバルの首都フナフティに滞在中、道を歩いている筆者に対して「Hello!」と声をかけてくるのはきまって小さな子どもたちであった。小学校高学年あたりになると「Talofa」とツバル語であいさつをするのが常である。英語の運用能力に関わらず、低学年の方が「英語を使いたい」という意欲や態度が強いのかかもしれない。この傾向が低年齢の子どもたち特有の好奇心によるもので、学年が上がるにしたがって弱まっていくものなのか、あるいは英語教育の方針の何らかの変化のため、今後児童の英語使用領域や頻度が年々高まっていくのかについては、さらなる調査が必要である。

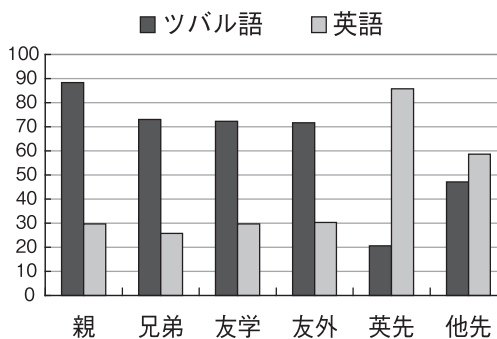


図11 全児童の領域別使用言語

4.3 調査結果 2：ツバル語と英語に対する志向

次に、質問の(3)～(7)にあたる「ツバル語と英語に対する志向」に関する結果をみていく。

まず、(3)「ツバル語を話すのが好きだ」、(4)「英語を話すのが好きだ」という文に対して「強くそう思う」「そう思う」「そう思わない」「まったくそう思わない」の4つの選択肢からもっとも当てはまるものを選んでもらった。その結果、ツバル語では「強くそう思う」：43%、「そう思う」：48.8%、「そう思わない」：1.2%、「まったくそう思わない」：2%となった（無回答：5%）。一方、英語では、それぞれ35.2%、49.8%、4%、2.8%であった（無回答：8.3%）（図12）。「強くそう思う」と「そう思う」を合わせると、ツバル語では155人中142人（92%）、英語では155人中132人（85%）となった。「強くそう思う」、「そう思う」ともにツバル語が英語をやや上回る結果となったものの、両言語に対して多くの児童が肯定的な感情をもっているようである。

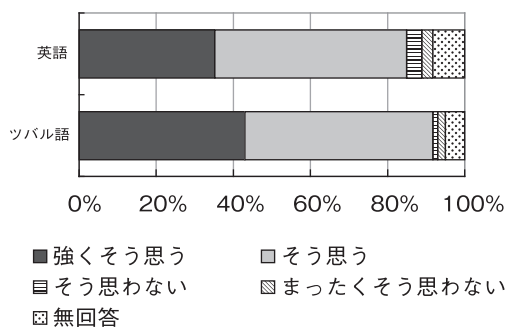


図12 「ツバル語／英語を話すのが好きだ」

学年別にみると、ツバル語に関しては、学年が上がるにつれて「強くそう思う」と「そう思う」を合わせた肯定的回答の割合が高くなるのがわかる。G9では、全員が「強くそ

う思う」(53.8%)か「そう思う」(46.2%)と答えている。一方、「強くそう思う」だけをみるとG4の58.8%が最も高い（図13）。

英語の「強くそう思う」と「そう思う」を合わせた割合は、G4、G5に比べてG7、G8、G9のほうがより高い割合を示している。一方で、「強くそう思う」だけをみると、G4が最も高く、概して高学年の方が低率となる（図14）。

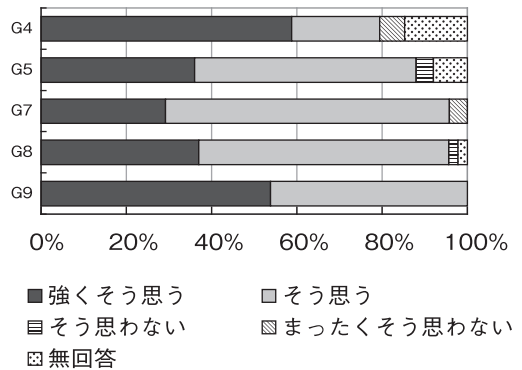


図13 学年別「ツバル語を話すのが好きだ」

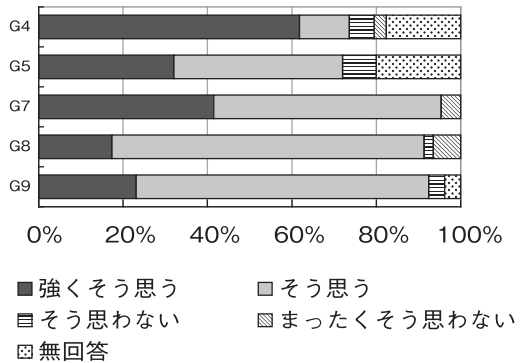


図14 学年別「英語を話すのが好きだ」

次に、(5)「授業中、英語とツバル語のどちらで教わりたいですか。また、それはなぜですか」という問いであるが、結果は、ツバル語：26.3%、英語：68.2%、両方：2.4%、未回答：3.1%となった（図15）。これは、「□ツバル語、□英語」のいずれかにチェック

を入れるものであったが、両方にチェックを入れたものが数名みられた。学年別にみると、G5を除くすべての学年で、英語がツバル語を大きく上まわった(図16)。これは、第2章で取りあげたDeverell(1986)の調査におけるツバル人の保護者の希望と同傾向である。

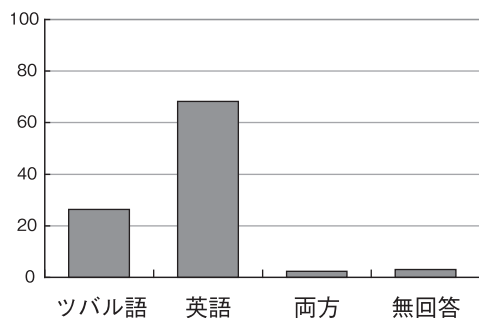


図15 希望する教授言語

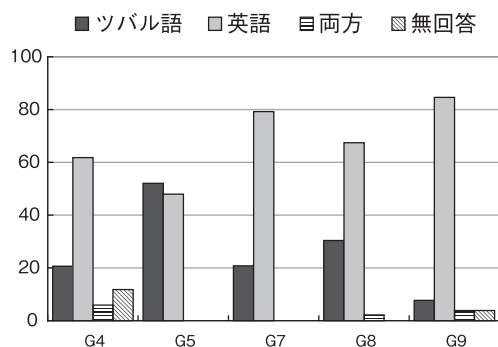


図16 学年別希望する教授言語

英語で教わりたいと回答した児童の主な理由としては、「英語が好きだから」、「英語が使えるようになりたいから」、「自分の将来のために重要だから」、「外国人と会話できるから」、「フィジーに留学したいから」、「世界共通語だから」、「ツバルに外国人が来たら英語が話せないといけないから」、「よい職に就くため」、「海外ではツバル語は使えないから」という趣旨のものがあがった。つまり、英語が好きだからということ以外の理由には、「よりよい将来のためには英語の運用能力が

必要であるから授業を英語で受けたい」という希望が感じられた。なお、ごく少数ではあるが(2名)、「英語の方がツバル語よりわかるから」という回答もあった。

一方で、ツバル語で教わりたいと回答した児童の理由としては、「理解しやすいから」、「英語はわからないときがあるから(苦手だから)」、「ツバル人だから(ツバル語は自分の言語だから)」、「ツバル語が好きだから」、「正しいツバル語を身につけたいから」といったものが多くあがった。これらの回答の傾向は、大きく2つの趣旨にわけられるだろう。すなわち、「授業内容をよりよく理解するために英語よりツバル語で教わりたい」というプラクティカルな理由と、「自分たちの言語であるツバル語で教わりたい」というアイデンティティに関わる理由である。後者の回答には、「他国の言語ではなく自分たちの言語を知ること大切なことだから (because it is important to know our own language not other countries language) (原文ママ)」というものも含まれる。

最後に、(6)(7)の「ツバル語/英語は自分の将来にとって重要だ」に対する回答をみる。結果は、ツバル語では「強くそう思う」: 36.6%、「そう思う」: 47.8%、「そう思わない」: 7.8%、「まったくそう思わない」: 2.2%となった(無回答: 6.7%)。一方、英語では、それぞれ67.9%、25%、0.8%、1.2%であった(無回答: 5%) (図17)。「強くそう思う」と「そう思う」を合わせると、ツバル語は84%、英語は93%である。「強くそう思う」だけをみると、英語が67.9%であるのに対してツバル語は36.6%であり、大きな差がみられる。また、「そう思わない」「まったくそう思わない」をみると、英語が0.8%(1人)、1.2%(2人)であるのに対してツバル語は7.8%(13人)、2.2%(4人)であり、ツバル語に重要

性を感じていない児童が一定数（155人中17人）いることがわかった。

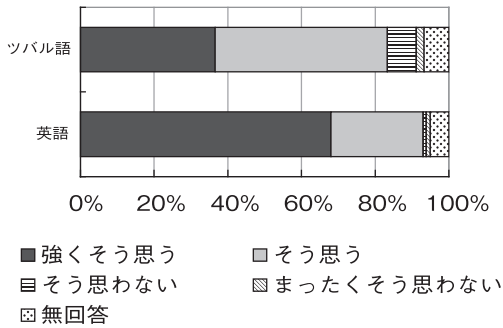


図17 「将来ツバル語／英語は重要である」

学年別にみると、ツバル語の「強くそう思う」「そう思う」を合わせた割合はG4、G5と比べて高学年であるG7、G8、G9の方がやや高い（G4：76.4%，G5：72%，G7：91.6%，G8：80.4%，G9：96.2%）（図18）。一方、英語の「強くそう思う」「そう思う」を合わせた割合はすべての学年で8割を超えている（G4：85.3%，G5：92%，G7：95.8%，G8：87.8%，G9：96.1%）（図19）。

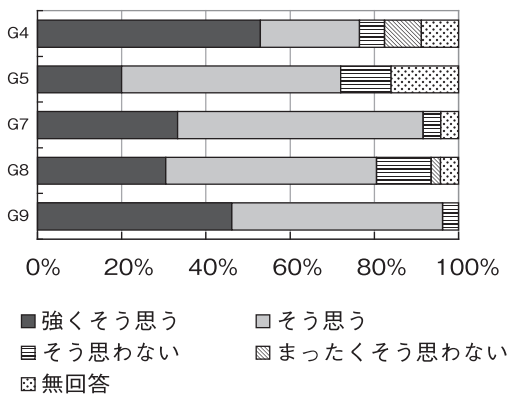


図18 学年別「将来ツバル語は重要である」

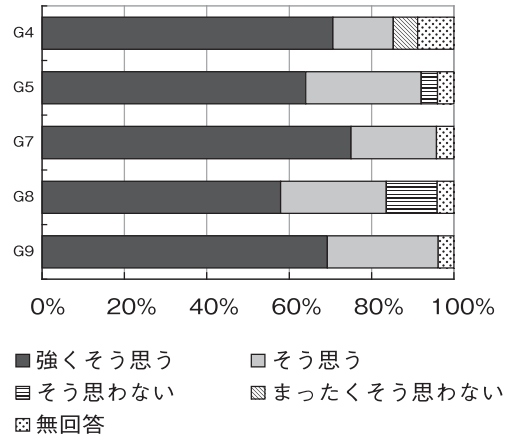


図19 学年別「将来英語は重要である」

4.4 調査結果3：将来の言語使用の希望・予測

ここでは、将来の言語使用の希望・予測について、(8)「将来どこに住みたいですか。それはなぜですか」、(9)「将来何がしたい／何になりたいたいですか」(10)「将来ツバル語と英語のどちらをどのくらいの割合で使用していると思いますか」の問いに対する児童の回答をみていく。

(8)は記述式の質問であったため、さまざまな回答がみられた。将来住みたい場所としてあがった回答をツバル国内と国外にわけてみる（図20）。自由記述のため複数回答も見られ、合計が100%を超える学年もあった。他方、将来に関する質問は低学年の児童にはやや難しかったようで、無回答も少なくなかった。なお、「その他」にあたる回答は、国名や地名ではなく「ホテル」「いい家」「高層ビル」といった類のものである。「国外」の回答には、国名ではなくたんに「外国 (i fenua palagi)」とする回答もみられた。G8、G9の高学年になると、将来の居場所をはっきりと答えられているようであった。ただし、G8とG9では回答傾向が大きく異なる。

G8はツバルが39.1%，国外が63%と海外移住志向が強いのにに対して，G9はツバルが69.2%，国外が30.8%と，国内志向が国外の2倍以上となった。

全学年でみると，ツバルが42%，外国が46.5%，その他の回答および無回答が11.6%となった。具体的な外国名としては，ニュージーランド，フィジー，オーストラリアが多くみられる。また少数派として南太平洋島嶼国であるサモア，アメリカンサモア，ハワイ，アジアからは唯一フィリピン，ヨーロッパからは唯一スコットランド，その他アメリカ合衆国，キューバなどが上がった。総じて，各学年の回答はさまざまであり，学年と将来住みたい場所の相関性はないようである。

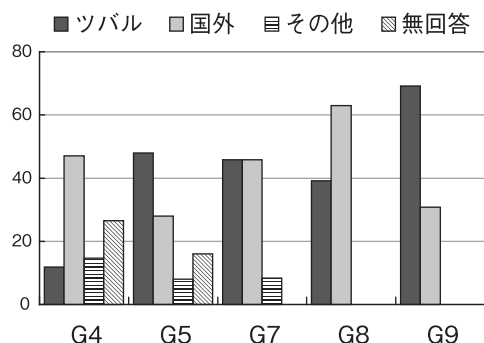


図20 学年別「将来住みたい場所」

では，ツバル国内に住みたいものと，海外に移住したいものは，それぞれどのような理由でそう希望しているのだろうか。表5は，住みたい場所とその理由に(9)の質問である「将来なりたいもの・したいこと」をくわえてまとめたものである。「理由」の右の「回答数」欄にある数字は将来住みたい場所の選択理由ごとに分類した延べ数である。「将来なりたいもの・したいこと」の欄には，各職種やしたいことの直後に，それぞれの回答数を数字で示した。

将来海外に住みたいと答えた児童の理由

は，以下の4点にまとめられる。すなわち，①よりよいくらし，②英語使用・英語学習，③気候変動，④家族との合流である。①では，充実した教育や豊富な雇用機会を求める回答が目立つ。これは予想していたとおりであったが，それだけではなく，ほかにもツバルにはないものへの希求やツバルとはちがう「別世界」に行きたいというような願望もみられた。たとえば，「雪の中で遊びたい」「涼しいから」「世界をみたい」「大きな家に住みたい」「みたことがないものをみたい」「スポーツが豊富」「ツバルよりきれいな環境」「すべての外国人がチャンスをもてる」などである。こうした回答をみるにつけ，筆者は2017年にニュージーランド在住のツバル人男性が語ってくれたことを想起する。筆者の「なぜニュージーランドに移住したのか」という質問に対して「第一に子どもの教育のためだ」と答えたある男性が，「学校教育だけじゃない。たとえば，ツバルには動物といえば犬，猫，豚，鳥くらいしかいない。子どもたちはキリンや象を図鑑でしか見たことがないんだ。でもここならいろんな動物を見ることができる」と続けたのであった(橘2019:40)。「みたことがないものをみたい」という類の回答は，まさにこうしたツバル人の実情を映し出している。②では，「英語を話したい」，「英語を勉強したい」などの欲求がみられた。③は，2件のみだが，「ツバルの気候変動のため」という回答があった。地球温暖化や気候変動による海面上昇や海岸浸食，高潮の頻発や干ばつの問題などツバルの環境悪化を危惧しての回答と考えられる。④は，家族の一員がすでに移民として海外に居住している児童の回答であろう。ツバルは，家族の一員が移民先でより高収入の職に就き，本国に残留する家族へ仕送りをするという典型的なMIRAB (Migration, Remittances, Aid and

Bureaucracy) 社会である。学校を卒業したら親の住むかの地へ向かい、合流することを願う児童も少なくない。

一方、将来ツバルに住みたいと答えた児童の理由は、①生活環境、②アイデンティティの2つに分けることができる。①は、自然環境にくわえて社会環境も含めた生活の場としての環境である。回答としては「美しい」「海で泳いだり釣りをしたりできる」「知っている人、友人、家族がいる」「平和・安全」「お金に困らない」などがあげられた。さらに、意外なことに、「火山噴火、嵐などの災害がない」「大国のような災害がない」など、自然災害の少なさをあげた回答もみられた。ツバルの環境悪化が原因で海外に移住したいという希望をもつものがある一方で、ツバルの環境がゆえに将来もそこに住み続けたいと願うものもいるのである。②に関しては、ツバルが自分のアイデンティティのありかであるということを訴える回答、すなわち「自分の

居場所だから」「ツバルの女の子だから」「母国だから」「自分自身を知りたい」「自国に貢献したい」などがみられた。さらに、とくに高学年には言語・文化に関する回答、「伝統文化を学びたい・守りたい」「ツバル語を学びたい・継承したい」などもみられた。

(9)の「将来なりたいもの・したいこと」では、国内外の居住希望にかかわらず、さまざまな回答が得られた。なかでも「医者」という回答が学年・希望居住地を問わず目立つ(35回答)。さらに「看護師」(6回答)を含めると、医療従事を希望する回答は41回答となる。この背景には、現在のツバル国内の医療の不十分さがある。事実、病気の治療のためという理由で他国へ移住するツバル人は多い。家族にそのようなものがある児童も少なくないだろう。ほかには、弁護士(14回答)、教師(11回答)、警察官(8回答)などが目立った。

表5 将来住みたい場所・なりたいもの／したいこと

学年	場所	回答数	%	理由	回答数	将来なりたいもの・したいこと
4	ニュージーランド	5	14.7%	英語を話したい	1	医者1, 軍隊1, 弁護士1, 優秀な生徒1, 仕事につきたい1
				雪のなかで遊びたい	1	
				金持ちで賢くなりたい	1	
				いろんな場所がある	2	
	フィジー	5	14.7%	きれいだから	3	医者3, 教師1, 無回答1
				英語を勉強したい	2	
				世界をみたい	1	
	ツバル	4	11.8%	きれいだから	2	医者1, オフィスワーカー1, 無回答1
				知っている人がいるから	1	
	サモア	2	5.9%	無回答	2	働きたい2
	外国	2	5.9%	英語を話したい	2	看護師1, 警察官1
	オーストラリア	1	2.9%	英語を勉強したい	1	銀行員1
	アメリカ	1	2.9%	ニューヨークで世界をみたい	1	無回答1
親のところ	2	5.9%	無回答	2	教師1, 両親の世話1	
ホテル	2	5.9%	無回答	2	無回答2	
涼しくてきれいな場所	1	2.9%	無回答	1	働きたい1	

学年	場所	回答数	%	理由	回答数	将来なりたいもの・ したいこと
5	ツバル	12	48%	美しい	4	大きなオフィスで働きたい4, 警察官2, 医師1, 看護師1, 教師1, 釣りがしたい1, 無回答2
				友達や家族がいる	2	
				自分の島が好き	4	
				海で泳いだり釣りをしたりできる	1	
				火山噴火や嵐などの災害がない	1	
	外国	3	12%	涼しいから	1	大きなオフィスで働きたい1, 無回答2
				好きだから	2	
	ニュージーランド	2	8%	教育が充実している	2	医者1, 海で水浴びがしたい1
オーストラリア	1	4%	好き	1	オフィスワーカー1	
アメリカ	1	4%	大きな家に住みたい	1	釣りがしたい1	
いい家	1	4%	いい人生を送りたい	1	警察官1	
ホテル	1	4%	自分の生き方ができる	1	オフィスで一生懸命働く1	
7	ツバル	12	50%	自分の居場所, 母国, 自国に貢献したい	9	医者5, 警察官3, 教師1, 弁護士1, したいことをする1, 無回答1
				ツバルの伝統・文化を学びたい, 守りたい, 自分自身を知りたい	2	
				大国のような災害がない	1	
	フィジー	3	12.5%	ツバルより涼しい	1	船乗1, 無回答2
				見たことがないものを見たい	1	
				国が大きい	1	
	ニュージーランド	3	12.5%	よりよいくらし, 教育, 雇用機会	1	教師1, 働きたい1, 無回答1
				ツバルより涼しい	1	
				見たことがないものを見たい	1	
	オーストラリア	2	8.3%	よりよいくらし, 教育, 雇用機会	2	警察官1, 会社員1
	アメリカ	1	4.2%	よりよいくらし, 教育, 雇用機会	1	外科医1
スコットランド	1	4.2%	ツバルよりきれいな環境だから	1	医者1	
フィリピン	1	4.2%	ツバルよりきれいな環境だから	1	医者1	
外国	1	4.2%	見たことがないものを見たい	1	会社員1	
高い建物	1	4.2%	無回答	1	無回答1	
8	ツバル	18	39.1%	ツバルの伝統・文化を学びたい, 守りたい, 自分自身を知りたい	1	医者5, 弁護士3, パイロット2, 教師1, 会計士1, 船長1, 接客業1, 看護師1, 金持ち1, 島を維持したい1, 家族で幸せに暮らしたい1
				ツバル語を学びたい, 継承したい	1	
				自分の居場所, 母国, 親と一緒にいたい, 自国に貢献したい	10	
				生活が楽, お金に困らない, 平和・安全	4	
				美しい	3	
				ツバルの女の子だから	1	
	ニュージーランド	13	28.3%	よりよいくらし, 教育, 雇用機会	11	弁護士6, 医者2, 牧師1, 接客業1, 国会議員1, 教師1, パイロット1
				ツバルの気候変動のため	2	
				無回答	1	
	オーストラリア	6	13%	スポーツが豊富	2	医者4, 弁護士2
英語が使える				1		
よりよいくらし, 教育, 雇用機会				3		
ツバルの気候変動のため				1		

ツバル人児童における母語と英語の捉え方 (橋)

学年	場所	回答数	%	理由	回答数	将来なりたいもの・ したいこと
8	フィジー	5	10.9%	大きい島	1	医者3, 船長1, 警察官1
	よりよい暮らし, 教育, 雇用機会			4		
	外国	3	6.5%	英語学習, 英語が使える	1	秘書1, 医者1, 無回答1
	アメリカンサモア	1	2.2%	家族がいるから	1	パイロット1
	キューバ	1	2.2%	美しい	1	軍人1
9	ツバル	18	69.2%	ツバルの伝統・文化を学びたい, 守りたい, 自分自身を知りたい	3	医者3, 教師2, 看護師2, いい娘(市民)2, 船長1, 銀行員1, 政府関係1, ツバル国民1, 役人1, 弁護士1, 会計士1, ツバルで働く1, 家族のために一生懸命働きたい1
	ツバル語を学びたい・守り, 継承したい			1		
	自分の居場所, 母国, 親と一緒にいたい, 自国に貢献したい			11		
	生活が楽, お金に困らない, 平和・安全			3		
	フィジー	3	11.5%	英語学習, 学校に通いたい, よい教育を受けたい	3	教師1, 看護師1, 医者1
	アメリカ	1	3.8%	英語学習	1	教師1
	ハワイ	1	3.8%	すべての外国人がチャンスをもてる	1	外交・貿易1
	ニュージーランド	1	3.8%	よりよい教育	1	医者1
	アメリカンサモア	1	3.8%	両親がそこで働いているから	1	牧師1
	フィジーやオーストラリアなどパイロットを養成している国	1	3.8%	パイロットになりたい	1	パイロット1

最後に, (10)で問うた「将来ツバル語と英語のどちらをどのくらいの割合で使用していると思うか」についてみてみたい。この質問は, 将来のツバル語と英語の予想使用率を, 合計100%になるようにそれぞれパーセンテージで記入してもらったものであったが, 多くの児童にとって難しかったようで, たとえば「ツバル語100%・英語80%」, 「ツバル語100%・英語100%」など, 想定外の回答が多数みられた。そのため, ①「ツバル語100%・英語0%」, ②「ツバル語>英語」, ③「英語>ツバル語」, ④「英語100%・ツバル語0%」, ⑤「ツバル語=英語」, ⑥「無回答」の6タイプに分類した。②と③には, 合計が100%にならない回答も含まれる。たとえば, ②は80%-40%など, とにかく「ツバル語>

英語」となる回答をすべて含んでいる。また, ⑤はツバル語と英語の使用率が同率ということであるが, 50%-50%以外にみられた100%-100%という回答も含んでいる。

その結果, ①「ツバル語100%・英語0%」という回答はどの学年にも皆無であった。また, 回答の傾向は各学年さまざま, 学年と使用言語の選択に相関はみられなかった(図21)。表6は, 全学年でみた両言語の予想使用率である。「ツバル語>英語」が「英語>ツバル語」に比べて多い結果となった。しかし一方で, 「英語100%・ツバル語0%」と答えた児童が4人いるということも, その逆が0回答であったことを考えると特筆すべきことかもしれない。また, 「ツバル語=英語」の回答は25.8%であった。

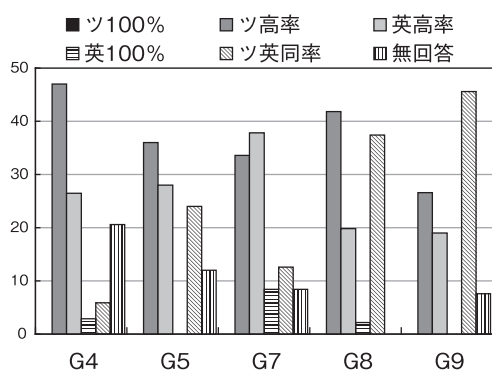


図21 学年別「将来の予想使用言語率」

表6 将来の予想言語使用率

①ツ100%	0 (0%)
②ツ>英	59 (38.1%)
③英>ツ	38 (24.5%)
④英100%	4 (2.6%)
⑤ツ=英	40 (25.8%)
⑥無回答	14 (9%)

5. 調査のまとめ—むすびにかえて

以上、ツバル人児童のツバル語と英語の捉え方について、①現在の言語使用の実態、②ツバル語と英語にたいする志向、③将来の言語使用の希望・予測の観点からみてきた。

①では、ほとんどの領域においてツバル語使用率が圧倒的に高いことがわかった。ただし、教師に対しては概して英語の使用率がより高く、とりわけ英語教師に対する英語使用率はきわめて高かった。なお、家族や友人との会話での英語使用率は、概して低学年の方が高学年よりも高いことがわかった。この調査では、日常的な言語使用率においてツバル語が英語を大きく上まわるなか、学校という領域においてのみ逆転現象が起きているという現状が明らかになったわけである。もし、今後少しずつツバル社会における英語使用が増えていくならば、そこには英語偏重・母語軽視の学校教育の少なからぬ影響が考えられ

るであろう。

②では、「ツバル語を話すのが好き」が「英語を話すのが好き」をやや上回ったが、両言語とも肯定的な捉え方が大半であった。また、両言語とも概して学年が上がるほど肯定的な回答の率が高くなるが、英語の「強くそう思う」の割合だけを見ると、概して低学年の方が高いという結果になった。希望する教授言語については、ほとんどの学年で英語がツバル語を大きく上回った。英語を希望する理由としては、「好きだから」のほかに、「よりよい将来のために英語力が必要だから」など、英語を「将来の成功へのカギ」と捉えた回答が多くみられた。一方で、ツバル語を希望する理由としては、「ツバル語はわかるが、英語はわからない」というプラクティカルな理由と、「ツバル語は自分の言語だから」というアイデンティティに関わる理由があがった。また、「将来重要である言語」としては、両言語とも肯定的回答の割合が高かったが、英語がツバル語を上回り、すべての学年で8割以上であった。なお、否定的回答は両言語とも多くないものの、ツバル語が英語の3倍以上となった。

③将来の言語使用の希望・予測に関しては、ツバル語を英語よりも高比率で使用するという回答が英語を高比率とする回答を上まわったが、100%ツバル語を使用すると答えたものが皆無であった一方で、100%英語と答えた児童が4名いた。また、将来住みたい場所を尋ねた質問では、国内志向よりも海外志向がやや上まわった。回答にあがった国名のほとんどは、英語を公用語ないし主たる使用言語とする国々である。このことを考えると、希望する外国に住みながら、ツバル語を英語より多く使用することは難しいだろう。

調査の結果を俯瞰すると、どの学年にも、将来の生活における英語の重要性を主張する

児童もいれば、母語としてのツバル語の重要性を訴える児童もみられた。その点では、第3章で確認した、英語を重要視しながらもツバル語・ツバル文化の維持や発展を謳うカリキュラム TNCPPF の思惑は、現在の児童の言語使用・言語志向に反映されているといえるかもしれない。しかし、カリキュラムと乖離したツバル語軽視の言語教育と、移民の増加にともない高まる英語需要が、ツバル人の言語志向を少しずつ英語の方へと傾斜させていると考えることは自然なことであろう。今後、政府の政策提言を追って調査を続けることが必要である。

注

- 1) ツバルが有する9つの島のひとつヌイ環礁には、キリバスにルーツをもつミクロネシア系の人々が住んでおり、彼らの母語はキリバス語である。
- 2) ツバル政府の報告によると、2017年のツバルの国内人口は10,507人で、そのうち6,320人が首都フナフティに住んでいる。(Tuvalu 2017 Mini Census Preliminary Report 1. https://sdd.spc.int/digital_library/tuvalu-2017mini-census-preliminary-report-1)
- 3) Stats NZ (<https://www.stats.govt.nz/tools/2018-census-ethnic-group-summaries/tuvaluan>)

参考文献

- Baker, Colin. 1997. *Foundations of Bilingual Education and Bilingualism*. Multilingual Matters Ltd.
- Biewer, Carolin. 2015. *South Pacific Englishes: A Sociolinguistic and Morphosyntactic Profile of Fiji English, Samoan English and Cook Islands English*. John Benjamins Publishing Company.
- Central Statistics Division. 2017. *Tuvalu Population & Housing Mini-Census 2017*.
- Deverell, Gweneth. 1986. "Towards the formulation of a language policy for Pacific preschools: a survey of language use by parents and teachers" In *Journal of Educational Studies*. no.16, vol.8: 73-86. Institute of Education, University of the South Pacific.
- Edwards, Frances. 2013. *The Effect of the Past on the Present: Cook Islands Teachers' Perceptions of Language Teaching*. US-China Education Review A, Vol. 3, 38-45.
- Eisner, W. Elliot. 2002. The Three Curricula That All Schools Teach. In *The Educational Imagination: on the design and evaluation of school programs* (3rd ed.) . Merrill Prentice Hall.
- Lotherington, Heather. 1998. 'Trends and Tensions in Post-colonial Language Education in the South Pacific'. In *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism* 1(1): 65-75. Taylor & Francis Group.
- Ministry of Education, Youth, and Sports, Tuvalu. 2013. *Tuvalu National Curriculum Policy Framework*.
- Ministry of Education, Youth, and Sports, Tuvalu. 2016. *2015 Statistical Report*.
- Ministry of Finance, Economic Planning and Industries Funafuti, Tuvalu. 2017. *Tuvalu Population & housing Mini-census 2017*.
- Moseley, Christopher (ed.). 2010. *Atlas of the World's Languages in Danger*, 3rd ed. Paris, UNESCO Publishing. Online version: <http://www.unesco.org/culture/en/endangeredlanguages/atlas>
- Simati, P. Sunema. 2009. *The Effect of Migration on Development in Tuvalu: A Case Study of PAC Migrants and their Families*. A thesis presented in partial fulfilment of the requirements for the degree of Master of Philosophy in Development Studies at Massey University, New Zealand.
- 橋広司. 2019. 「南太平洋島嶼国からの移民」『ニューージーランドTODAY』ニューージーランド学会編. 春風社.
- 橋広司. 2020. ツバルの英語教育における言語教育観－母語教育との関連を考慮に入れて』『日英言語文化研究』第7号. 日英言語文化学会. 25-36.

謝辞

本稿は金城学院大学特別研究助成費による調査の成果の一部である。ここに心より感謝の意を表す。

【資料1】質問紙（英語）

Questionnaire

Please answer the following questions. Your responses will be kept confidential and be used for research purposes only.

Please tick ✓ in the box below.

Gender: Male Female

Age: 5 -9 10-19 20-29 30-39 40-49 50-59 60-69 70-79 80-89

1. You like speaking te gana Tuvalu.	<input type="checkbox"/> Strongly agree <input type="checkbox"/> Agree <input type="checkbox"/> Disagree <input type="checkbox"/> Strongly disagree
2. You like speaking English.	<input type="checkbox"/> Strongly agree <input type="checkbox"/> Agree <input type="checkbox"/> Disagree <input type="checkbox"/> Strongly disagree
3. In everyday life, which do you use more, te gana Tuvalu or English?	<input type="checkbox"/> Te gana Tuvalu <input type="checkbox"/> English
4. Which do you speak more in the following situations, te gana Tuvalu or English?	Te gana Tuvalu English
	With your mother <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
	With your father <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
	With your brothers or sisters <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
	With your friends at school <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
	With your friends outside school <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
	With your English teacher <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
With your teacher of other subjects than English <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	
5. In class, which do you prefer, being taught in English or in te gana Tuvalu? Why?	<input type="checkbox"/> Te gana Tuvalu <input type="checkbox"/> English Why?
6. English is important for your future.	<input type="checkbox"/> Strongly agree <input type="checkbox"/> Agree <input type="checkbox"/> Disagree <input type="checkbox"/> Strongly disagree
7. Te gana Tuvalu is important for your future.	<input type="checkbox"/> Strongly agree <input type="checkbox"/> Agree <input type="checkbox"/> Disagree <input type="checkbox"/> Strongly disagree
8. Where do you want to live in the future? Why?	Where?
	Why?
9. What do you want to do/be in the future?	
10. What percent of te gana Tuvalu and English do you think you will be using in the future?	Te gana Tuvalu _____ % English _____ %

Thank you very much for your cooperation!

【資料2】 質問紙（ツバル語）

Pepa Fakafesili

Fakamolemole tali mai a fesili konei mai lalo. Au tali ka tausi 'funa kae ka fakaoga fua i faiga o sukesukega.

Fakamolemole faka sao ✓ i te pokesi e tonu, mai lalo:

Tenita: Tagata Fafine

Tauhaga: 5-9 10-19 20-29 30-39 40-49 50-59 60-69 70-79 80-89

1. Koe e fiefia o faipati i te gana Tuvalu.	<input type="checkbox"/> Tonu 'kii <input type="checkbox"/> Tonu <input type="checkbox"/> Se tonu <input type="checkbox"/> Se tonu 'kii	
2. Koe e fiefia o faipati faka 'palagi.	<input type="checkbox"/> Tonu 'kii <input type="checkbox"/> Tonu <input type="checkbox"/> Se tonu <input type="checkbox"/> Se tonu 'kii	
3. I aso taki tasi, ko te gana fea e fakaoga e koe, ko te gana Tuvalu me ko te gana Palagi?	<input type="checkbox"/> Gana Tuvalu <input type="checkbox"/> Gana 'Palagi	
4. Ko te gana fea e fakaoga 'soko ne koe, ko te gana Tuvalu io me ko te gana Palagi mana faipati koe mo:		
	tou matua?	Gana Tuvalu <input type="checkbox"/> Gana Palagi <input type="checkbox"/>
	tou tamana?	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
	ou taina mo tuagane?	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
	ou taugasoa i te akoga?	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
	ou taugasoa i tua o te akoga?	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
	tou faiakoga o te gana Palagi?	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
ou faiakoga o niisi mataupu aka?	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	
5. I loto i tau vasega akoga, a koe e manako ke fai au akoakoga i te gana Palagi io me i te gana Tuvalu? Kaia?	<input type="checkbox"/> Te gana Tuvalu <input type="checkbox"/> English	
	Kaia?	
6. A te gana Palagi e aoga ki tou olaga i aso mai mua.	<input type="checkbox"/> Tonu 'kii <input type="checkbox"/> Tonu <input type="checkbox"/> Se tonu <input type="checkbox"/> Se tonu 'kii	
7. A te gana Tuvalu e aoga ki tou olaga i aso mai mua.	<input type="checkbox"/> Tonu 'kii <input type="checkbox"/> Tonu <input type="checkbox"/> Se tonu <input type="checkbox"/> Se tonu 'kii	
8. A koe e fia nofo ifea i aso mai mua? Kaia?	Ifea?	
	Kaia?	
9. Mo aso mai mua (nia au mea e fia fai?) / (a koe e fia aa?)		
10. Mata e fia pasene o te gana Tuvalu mo te gana Palagi kae fakaoga ne koe i aso mai mua?	Gana Tuvalu _____ % Gana Palagi _____ %	

Fakafetai lahi mo tou tufaga.